

卒業の日に贈る言葉

困難と試練を乗り越えた卒業生の皆さんへ



中央大学学長
河合 久
KAWAI Hisashi

様々な困難と不自由な時期にあっても、修学と研鑽を継続し、この度、幾多の試練を乗り越えて中央大学の学位記を取得された皆さんに対して、心からお祝い申し上げます。また、本学卒業生の学修や活動に際して、惜しみない支援や協力を寄せられたご父母とご家族、温かく力強い指導をいただいた教職員、連携先の地域・組織のご関係者、本学出身者の皆さんのご厚情や友情に、感謝と敬意を表します。

皆さんの学生生活の終盤は、コロナ禍において授業がオンライン型とハイブリッド型を中心とせざるを得ず、授業でのフィールドワークや実験、あるいはクラブ・サークル活動が制限され、閉塞感を禁じ得ないほどの情勢変化に直面しました。しかし、このパンデミックは私たちに多くのことを教えてくれています。私たちは、この間に失いつつあるものよりも大きな価値を追求しなければなりません。いったいそれは何か、皆さんも時間の余裕があれば、立ち止まって考えてみてください。今社会は、アフターコロナを見据えた新しい道筋を模索しています。未曾有のコロナ禍にあって、産業構造やその社会基盤の変化が顕著です。また、多様化の時代を迎え、私たち人類は、従事する当面の仕事や得意分野にこだわらず、異分野との融合、そして、まったく新しい人間関係や組織間の有機的相互関係をもって、新たな世界を共創していく時代に直面しています。

中央大学で学び、手にした学位を胸に、学生生活から得た成果を確認し、それを新たな世界に価値あるものとして実装できるよう心掛けていただくことを、心から期待しています。そのことこそが本学のユニバーシティメッセージである「行動する知性。」を、ご自身によって体現することになるからです。そして今後いろいろな機会に本学との絆を大切にいただき、皆さんの知性を本学に還元していただければ幸いです。

結びに当たり、皆さんには、中央大学の卒業生であるという誇りをもって、これからの人生を堂々と歩まれることを祈っております。くれぐれも健康に気を付けて、元気にご活躍されることをお祈り申し上げます。卒業おめでとうございます。

「学士（法学）」の重みとその価値



法学部長
猪股 孝史
INOMATA Takashi

卒業生の皆さん、ご卒業、まことにおめでとうございます。皆さんに心よりお祝いを申し上げます。そして、この晴れの日を迎えるまで、卒業生の皆さんをよく理解し、寄り添ってこられた、ご家族の皆さん、ご関係の皆さんにも、祝意と敬意を表したく存じます。

中央大学は、1885(明治18)年、「英吉利法律学校」として創立されました。同年9月19日、江東中村楼で行われた開校式において、福澤諭吉は、以下のような祝辞を述べたと伝えられます(本学名誉教授・金原左門『『法の実地応用』をふりかえって』中央評論296号[2016年]17頁)。

「法律は社会のあらゆる領域に及ぶものであり、法律は人間生々の学であり、多くの法律家が養成されることが期待される。成業の上、官吏・代言人になることだけが重要なことではない。そんなに沢山の官吏・代言人を社会が必要にしているわけでもないからである。諸君には官吏・代言人にならなくとも、その知識を様々な事業に適用して、一身を護り、一家を護り、屹然たる独立の男子となることを希望する。注意すべきことは、法律を学んで容易にこれを用いないことである。昔封建時代には、刀を抜いて犬を切る者は未熟な若武者に限る、真成の武士は終身刀を抜かず、抜けば必ず敵を切りて誤らずと言ったものである。諸君もこれに学び、(妄りに法知識を振り回すことなく、)法律を以て犬を切ることなく、常日頃は黙して法理を言わず、法知識を使うときは法の敵を斃し、自分の権利榮譽を護るべきである。法律学徒がどちらの途を歩むかは、学識が深い浅いかによる。学生の皆さんの学問が深くなることを期待する。」

この趣意は、卒業生の皆さんにも献じられてしかるべきものを含みます。ここで語られている言葉は、その当時の事情を考慮しても、現代からみればいささか穏当さに欠ける憾みがないではありません。けれども、その真意をしかと酌むならば、法を学び、法を学んだ者の心映えを見事に看破しているように思えます。

卒業生の皆さんは、中央大学法学部所定の課程において、法学、政治学を修めたことの証として、「学士(法学)」の学位を授与されました。皆さんの学問は深くなったものと拝察します。福澤諭吉がその祝辞に込めた趣意、そして「学士(法学)」のもつ重みとその価値を心に深く刻みつつ、卒業生の皆さんが、それぞれの進路や環境においてご発展、ご活躍されることを心から願って、はなむけの言葉とします。



経済学部長
佐藤 拓也
SATO Takuya

ご卒業おめでとうございます。皆さんにとって、大学生活の最後の2年間は、新型コロナウイルス感染症によって多くの犠牲を強いられるものとなってしまいました。困難の中でも学修や学生生活を続け卒業されていく皆さんに、あらためて敬意と祝意を表します。

もともと、社会に出ると、コロナに限らず様々な困難にぶつかることもあるでしょう。そんな時、皆さんには、「非難」ではなく「批判」のできる人であってほしいと思います。

よく「あの人は他人の批判ばかりする」などと言う時、ここでは批判と非難がほぼ同義に使われています。しかし、批判と非難は違います。非難は、他人の過ちや欠点、物事の問題の責任を責め立てることです。文句を言っているだけ、かもしれません。これに対して、批判とは、問題点を指摘することまでは似ていますが、その問題状況を分析し、原因や事態の本質を明らかにして、何よりも、それを絶対的に動かし難いものと見るのではなく、それを乗り越えて、時には変革さえしようとする態度のことです。

私たち研究者の仕事は、社会現象や自然現象、またそれらについての先行研究を対象にして、上の意味での批判をする仕事です。皆さんは、研究教育機関である大学で学問を修めました。ですから、研究が持つ上のような批判的な精神が、濃淡の差はあれ身につけているはずで、これから自分の属する職場や地域などで様々な問題に直面した時に、それに文句を言うだけの非難ではなく、大学で身に着けた批判を試みて下さい。動かないと思っていた状況や環境が、乗り越えうるものであることに気付くことも、きっと出てくるはずで。

また、非難ばかりしていると、気持ちも後ろ向きになります。これに対して、きっちり批判のできる人は、何かを乗り越えようとするポジティブな精神になっていくでしょう。さらに、いざ問題に直面した時でも、自身の内側にひとりで問題を抱えこむ必要もなくなります。自分がダメな人間だから問題が起きているのではなく、客観的な事実の中に問題の原因や本質があるはずで、それを分析して明らかにしようとする批判的な見方は、きっとこの先、自身の精神衛生上の助けにもなってくれるはずで。

皆さんが、健全な批判的精神を持って大いに活躍されることを、心より願っています。

非難ではなく批判のできる人として



ご卒業おめでとうござります



商学部長
井上 義朗
INOUE Yoshio

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。晴れてこの日を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。また、ご家族様をはじめ、これまでの長い年月つねに寄り添い、支えてこられた多くの皆様方にも、心よりお祝い申し上げます。

今期卒業される皆さんは、大学生活の後半2年間、新型コロナウイルスの感染拡大によって、本来とは大きく異なるかたちの大学生活をおくられました。キャンパスへの入構が制限され、オンライン授業の受講や部活動の制限、あるいはオンラインによる白門祭の開催など、これまで誰も経験したことのない厳しい状況のなかで、大学生活をおくられました。何とかコロナ以前の環境を維持しようと、教職員ははじめさまざまな取り組みを行いました。本来の大学の姿をそのまま維持することはできなかったと思います。

それでも皆さんは、そうした状況に屈することなく努力を続けられ、立派に学業を納められて今日の晴れの日を迎えられました。どうぞこの2年間の努力と経験に自信と自負をもって、新しい世界へと羽ばたいて行ってください。

昔、ある経済学者がこんなことを言いました。「人はなぜ未来を予測できると考えるのか。それは、未来といえども過去の延長上にあると考えるからだ。では人はなぜ、未来を予測したいと考えるのか。それは、未来は過去の単なる延長ではないと考えるからだ」。皆さんがこれまで大学で学んできたことは、皆さんの未来にかならずや豊かな果実をもたらすことでしょう。大学で教わったときは、何の意味があるのかわからなかったことも、そのときが来れば、なぜあのとき先生方があれほど力をこめて講義していたのか、その意味がはっきりとわかるはず。そういう瞬間に、皆さんはこれから何度も遭遇することでしょう。大学で過ごした日々が、皆さんの未来をしっかり支えてくれることでしょう。

他方で皆さんの未来は、皆さん自身で作らなければならないものです。大学生活でできたこと、できなかったこと、いろいろな思いがあることと思います。それらをひとまとめにして、未来はまた一から自分で作ることができるのです。もちろん、他の人びととの関わりや、周りの人びとへの配慮を忘れることはできません。皆さんは大学生活を通じて、こうした事柄の大切さについても、多くを学んだことと思います。

どうぞ大学生活の思い出を糧に、思い切り張り切って、自分らしい未来を築いて行ってください。

コロナ禍で皆さんが得たもの



理工学部長
梅田 和昇
UMEDA Kazunori

中央大学を卒業する皆さん、ご卒業おめでとうございます。

卒業していく学生の皆さんに毎年お伝えしている「卒業おめでとう」が、今年は普段と違った響きを持つように感じられます。コロナ禍により、皆さんの卒業前の2年間は、大きな影響を受けましたね。講義はオンラインとなり、サークル活動に参加したり懇親の場を持ったり普通に友達と会ったりということすら制限され…。特に大学院生の皆さんは、学会発表がオンラインとなり、海外に行つて国際会議での発表を行ったり現地の方々と交流をしたりすることが叶わなかったのは、大変残念でしたね。

デジタルに慣れ親しんだ皆さんですから、この時代の激流を苦も無く乗り切った方も多いと思いますが、これまで我々が体験したことのない分断された時代の中、精神的に落ち込んだり、つらく苦しい思いをした方もいると思います。そういう中で、それでも皆さんは授業をしっかり受けて必要な単位を取得し、ゼミや研究室での研究を精一杯頑張つて卒業論文や修士論文を書き上げ、ここに至った訳です。私達教職員にとっても、学生の皆さんにとっても、感慨深い「卒業おめでとう」だとしみじみ思います。

皆さんが社会に巣立ってから・あるいは大学院に進学してから、コロナとはまだしばらくはつき合つて行かなければならないでしょうが、歴史が教えてくれるように、感染症は一定の時を経れば必ず収束しますので、しばらくの辛抱です。しかしながら、これからの世の中何が起るかわかりません。皆さん個人の今後の人生の中でも、色々な課題や壁にぶち当たるのが何度もあると思います。そういう時にこそ、皆さんがコロナ禍の中で身に付けたスキル、そして困難を乗り越えた強さが必ず役に立ちます。人は、何もなしで成長はできません。この困難な状況で例年の学生以上に努力をして勉強や研究を遂行した皆さんは、知らず知らずのうちに大きく成長したと確信しています。是非これからの人生を、自信を持って進んでいって欲しいと願っています。何年も経ってから、学生時代は色々大変だったけれどもそのおかげでその後頑張れたよね、と同窓の仲間と懐かしく振り返る時がきっと来ると思います。

皆さん、改めまして卒業おめでとう！皆さんの今後の人生が幸多きことを心から願っています。

たったひとり／ともに創る、よき人生の旅を！



文学部長
新原 道信
NIIHARA Michinobu

これから“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立つ”皆さんへ。長いようで短かった学生生活が終わり、これから新たな社会生活が始まることに、少しでも不安な気持ちになっているかもしれません。その皆さんに伝えたいことがあります。「あたりまえ」だったものを失うことは悪いことばかりではありません。ひとは、異郷／異教／異境の地で、はじめてものを考えます。慣れない環境での居心地の悪さも、「何かを考える環境として、そう悪くないのかな」と自分に言い聞かせ、新たなことに驚嘆する気持ちと探求心を持ち続けるようにしてください。

働き始めれば、理不尽なこと、不条理なことにぶつかり、実社会で生きることのたいへんさを感じるかもしれません。しかし、ない袖はふれませんが、私たちは、自分がどう生きてきたかに縛られるところがありますが、他方で、そのかけがえのない個々の体験に根ざした強みを持っています。学生時代、何の意味があるかもわからず、やみくもに、ひたむきにやっていた「汗かき仕事」——予期しないことが次々起こり、途方にくれ、仲間と議論し、時にぶつかり、「卒論や報告の後の生ビールの最初の一口の味だけ覚えている」という感覚をふと思い出すことがあるでしょう。すでにやるとはなしにやっていた探求や探究の時間、不思議なことに出会い、驚き、驚嘆し、好奇心や遊び心で、つらさやたいへんさを忘れた瞬間——過去の自分からの「贈り物」の範囲でしか、意味あることは出来ないところがあります。

大学も最初、皆さんにとって異郷／異教／異境の地だったはず。その地で、様々な先生や先輩や同級生や街のひと、異なるタイプの様々な他者に出会い、汗をかき、いつしかともに（共に／伴って／友として）創ることを始めたはず。社会のなかで、うごき、ながされ、もがいているとき、どうか思い出してください。ただひたすら悩み、立ち止まり、さまよった日々を。そこからの智恵をつかみ直してもらえればと思います。

“変転の時代”を生きていくことになる皆さんへ。これから本当にたいへんな時代を生きていくことになります。誰も「解決策」など持っていません。社会の「観客」ではなく「プレーヤー」として汗をかくしかありません。生身の現実というフィールドで、全身で全時間、ワークすることが現実となるのです。だからこそ、“驚きと遊び心と探求心”を大切に、どうかよき人生の旅を！



総合政策学部長
青木 英孝
AOKI Hidetaka

自分の頭で考え、自分の足で歩け

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。また、ご家族をはじめ皆様をこれまで支えてこられた方々にも謹んでお喜び申し上げます。

卒業生の皆さんは、3・4年生の時にコロナ禍となってしまいましたが、当初は不慣れだったオンライン授業への出席も、その後は日常の一部になり、さらには就職活動もオンライン併用の中で乗り切ってきたことと思います。皆さんには、世の中の変化への対応力があるということです。中大で“実地応用の素”を養ったわけですから、こういった不確実性が大きな時代にこそ、身につけた基礎力をいかして、しなやかに、力強く生きていって欲しいと思います。ユニバーシティメッセージは“行動する知性”。ゼミ生には“自分の頭で考え、自分の足で歩け”と言ってきました。批判はするが自ら動けない人ではダメ。他人から言われたことだけをこなす指示待ちでもダメ。自分で考え、自分で行動すること。自立した大人であることが求められると思います。

学生生活を振り返ると、ゼミでの卒業研究、試験やレポート、リサーチ・フェスタなど、学びの場はたくさんあったと思います。多くの本を読み、先生やゼミ生と議論し、論理的思考力を鍛えられたでしょうか。スポーツや文化活動では、トレーニングで体を鍛えるとともに、音楽・美術・演劇・落語などに触れ、心を豊かにし、感性を磨けましたか。また、サークル、アルバイト、ボランティアなど、キャンパス外でも貴重な社会勉強ができたのではないのでしょうか。

総合政策学部では、学際性と国際性をベースに問題解決の手法を学んだと思いますが、文化や価値観の多様性を実感できたでしょうか。異文化理解力はグローバル化する社会で大きな価値を発揮し、複眼思考は多様化する社会できっと役に立ちます。ダイバーシティが求められる今、学際性と国際性の力は、相手の立場に立って考えることや、相手を認めて許容するといった、人として本当に大切な姿勢に反映されてくるはず。皆さんが手にした学位記は中央大学で学んだ証です。中大卒業生としての自覚と自信をもって、新しいフィールドでも益々活躍ください。

余談ですが、先日ゼミ生と初任給どうするトークをしました。ぜひ、皆さんをこれまで支えてきてくれた大切な人に、感謝の気持ちを伝えてください。普段から何気なく感謝していても、気持ちを素直に伝えられる機会はさほど多くないかもしれませんので。